

松本 悟 先生を偲んで

## 追悼 松本 悟 先生

長嶋 達也

公益財団法人 日本二分脊椎・水頭症研究振興財団 会長  
兵庫県病院事業管理者

公益財団法人日本二分脊椎・水頭症研究振興財団の創立者であられた松本悟先生が、平成29年11月7日、神の御許に召されました。最も敬愛していた松本先生を失い、あらためてかけがえのない偉大な存在であったことを深く感じています。脳神経外科医の弟子の一人として、そして財団の後任会長として先生の歩みとご功績を振り返り、松本先生を偲びたいと存じます。

松本先生は、昭和2年(1927)に兵庫県姫路市で生を受けられ、中学時代は第二次世界大戦の中で過ごされました。戦中に海軍兵学校に進み、昭和20年8月18歳になって間もなく敗戦を迎えられました。海軍兵学校最後の75期卒業生として、青春を戦争と戦後の混乱の中に過ごされました。戦後の混乱に耐え、京都大学医学部に進み、医師とられました。昭和29年にご卒業後は、京都大学荒木千里教授の門下に入り、当時まだ黎明期の脳神経外科の道をお選びになりました。

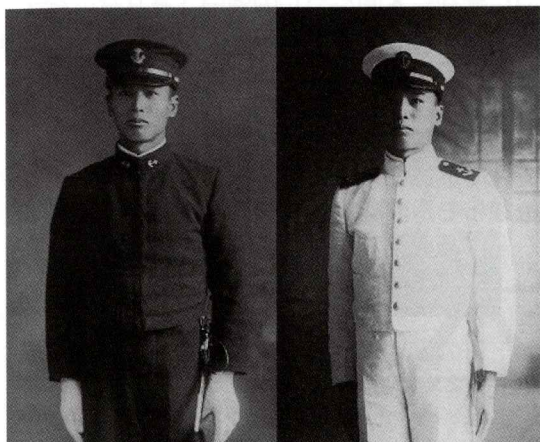
昭和37年、米国シカゴのノースウェスタン大学への留学を機に、互いに尊敬しあう盟友ともいふべき Anthony J. Raimondi 教授(1928-2000)に出会い、シカゴの小児病院での研鑽を経て、小児脳神経外科を生涯の仕事として選ばれました。昭和41年から1年半のマックスプランク脳研究所(ドイツ、ケルン)における脳腫瘍の研究を経て帰国されました。

昭和46年、44歳の時に神戸大学脳神経外科の初代教授に就任されました。緻密な講義および指導により学問と臨床に厳しい教授として知られましたが、同時にそのお人柄には学生から深い敬慕の念が寄せられました。豊かな学識と卓越した指導力により大学院生や教室員の養成に尽力され、薫陶を受けた脳神経外科医の多くが、兵庫県下はもとより全国的・国際的に活躍されています。

日本の脳神経外科の草創期の教授として、昭和47年に日本小児神経外科学会の創設、昭和48年に第1回国際小児神経外科学会の日本での開催(主催)に始まり、長く日本小児神経外科学会の代表世話人と機関紙編集委員長としてわが国

の小児脳神経外科の発展に尽くされました。昭和57-58年には国際小児神経外科学会会長、昭和62年には第47回日本脳神経外科学会会長を務められるなど、数々の国内外の学会の会長を務められました。厚生労働省、文部科学省の研究班の班長・班員としてのご業績も多大なものがあります。小児脳神経外科医の中には松本先生をお慕いする方は多く、まさしく日本の小児脳神経外科の「父」と言えます。

平成3年3月(1991)のご退官後は、特定医療法人慈恵会新須磨病院常任顧問に就任されて診療をお続けになりました。平成5年12月9日に厚生省より正式認可となった(財)日本二分脊椎・水頭症研究振興財団を創設し、二分脊椎と水頭症に苦しむ子供たちのための研究と福利に尽くされました。財団設立に当たっては準備に5年の歳月を要し、慈恵会前理事長の故・澤田善郎様(財団初代理事長)の大きなご支援がありました。財団創設時から研究助成の選考委員長を務められた新潟大学名誉教授・生田房弘先生、理事・評議員を務められた多くの皆様の松本先生への無条件の信頼と支援には心打たれるものがあります。初めての研究助成は、平成7年2月24日、順天堂大学でその授与式が行われました。1月17日の阪神淡路大震災直後のため新幹線が途絶する中、会場を東京に移しての開催でした。平成23年には、困難を乗り越え公益財団法人に認定され、昨年六月まで財団会長を務められました。設立以来、財団の運営は決して楽なものではなかったはずですが、松本先生はこのようなご苦勞について語られることを潔しとされない方でした。財団設立の頃からわが国における金利が急速に下がり、現在のマイナス金利政策にいたるまで低下を続けました。基本財産に基づく財団運営の困難は想像に難くなく、財団の活動は多くの方々への尊い善意に支えられて継続いたしました。財団機関紙 B&C 創刊号(平成5年7月13日)に松本先生が寄稿された「一粒の麦」に、「一人でも多くの方々から、同じ人間として、また隣人として手を差し伸べていただきたいのであります。それがどんなにささやかな善意の輪でありましても、その輪は必ずや大きく広がっていくと確信しています。一粒の麦が死なずにそのままおかれるならば、いつまでも一粒でしかあり得ませ



海軍兵学校時代 昭和19年(1944年)



神戸大学病院 教授回診 平成3年(1991年)

ん。落ちた麦は死んでも新しい実が結ばれるであります。財団の存在を知っていただいた方々の中で、その活動に共鳴していただき、ご協力をお願いしますならばそれにすぎる喜びはありません」と書かれました。松本先生は、この尊い善意というものを信じ続け、そしてそれを受けることができることを深く感謝しておられました。

私どもの財団は、「二分脊椎」と「水頭症」の予防や治療法が少しでも進むよう、またこれらの患者さん方に対し生涯の療養が少しでも良くなるための様々な活動を行うために設立されました。最大の使命である研究の支援については、平成6年度～平成28年度の助成期間に、95件（応募689件）、総額82,000,000円の助成金を贈呈してまいりました。多数の応募の中から、選考委員長の生田房弘名誉教授はじめ選考委員の先生方のご尽力により、厳正な選考をへて本当に素晴らしい研究テーマと研究者を選んでいただけたことが何にもまして貴いことでもあります。この仕事は、松本先生が深い信頼を寄せておられた山内康雄選考委員長（鶴見緑地病院名誉院長）に引き継がれ、すでに平成29年度の選考を無事に終わりました。研究助成に加えて、患者家族・本人を対象にした研修会やシンポジウム、学術集会開催の助成、二分脊椎・水頭症のハンドブック作成など、様々な活動がくり広げられました。平成2年には国際水頭症シンポジウム、平成9年、12年、15年と三回にわたり国際二分脊椎・水頭症国際シンポジウムを主催されました。

平成25年の年明け、話したいことがあるということで、会長室を訪ねたところ、財団の会長後任の打診を受けました。この時、現役時代に教授室で接した松本先生と変わりのないと感じましたが、すでにお体の衰えを自覚しておられたのではなかったかと思えます。平成27年10月に入院なさってからお体の衰えが進み、会長室に顔を出されることも少なくなられたと聞いています。平成28年3月の財団理事會に気力を振り絞って出席され、財団会長の引継ぎを終えられましたが、これが公の席へ姿をお見せになった最後の機会となりました。振り返ってみればぎりぎりの引継ぎのタイミングであり、松本先生の3年をかけた周到なお計らいでした。

平成28年10月には、松本先生が創設者のお一人であり、第1回の会長を務められるとともにその発展に力を尽くされた国際小児神経外科学会の第44回総會が、財団の理事であられた山崎麻美先生を会長として、神戸で開催されたことは幸いなことでした。松本先生の出席はかないませんでしたが、会場には松本先生のビデオメッセージが放映されて、海外か

らの参加者にも深い感銘を与えました。その後、平成29年6月に山崎先生が急逝されたことは本当に悲しいことでした。

平成29年3月末にご自宅を訪問し、4月に兵庫県立こども病院の院長を退職し兵庫県病院事業管理者に就任すること、そして6月に私が会長として神戸で開催する第45回日本小児神経外科学会の報告をいたしました。松本先生が創設者であり、第2回は会長として神戸で開催された学会であり、かろうじてご存命中に再び神戸で開催できたことは幸いでした。この頃には足元と言葉がだいぶ不自由でいらっしやいましたが、その毅然とした精神を保っておられたことに深い感銘を受けました。

平成29年10月末にいよいよ具合が悪くなられ、澤田院長はじめ新須磨病院の皆様と新須磨病院に勤務する弟子の脳外科医達による手厚い看取りの医療を受け、11月7日にご家族に見守られてその生を終えられました。松本先生は、最期までその高潔で毅然とした精神を保ち、ご自身の体力と寿命を見極めた上で心血を注がれた財団を次の世代に引き継ぎ、縁の深い二つの学会が神戸で開催されることを見届け、そしてご家族に見守られて天に召されました。

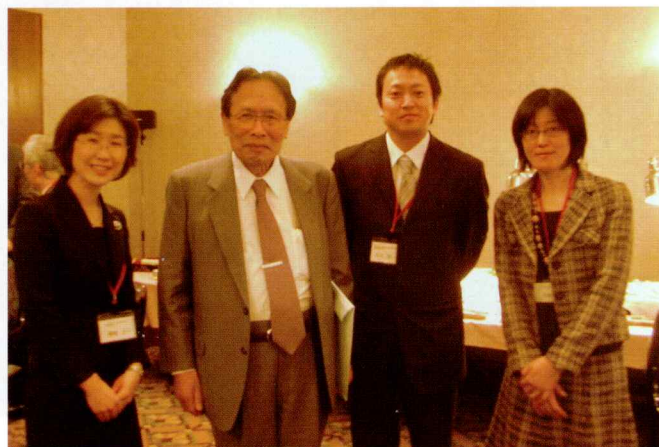
私自身は、大部分を公人としての松本先生に接してまいりましたが、傑出した脳神経外科医、指導者として常に仰ぎ見る存在でした。一方、お正月に奈良、須磨、そして垂水のご自宅にお招きいただいて接する先生は別人のようであり、一私人として、ご家族にとって良き夫、良き父であられたことと思えます。

先生は言葉の多い方ではありませんでした。しかし、ふとした時に、心に残ることを言われました。「自らに属するものは、自らの行動とその結果だけである」ということを最もよくご存じの先生でした。また、「最も大切なことを正面に据えろ」ともおっしゃいました。そのようにして生きてこられたのだと思います。一度だけですが、ポツリと「人間は誰でも重い荷物を背負っている」とおっしゃったこともあります。先生が背負っておられるものが何であったかをお尋ねすることはありませんでしたが、先生の生き方は、信仰に支えられた、そして自らに厳しいものでした。天に召されることによって、すべての荷物を降ろし、安らかな世界に行かれました。私たちにとって、松本先生のような特別な方にお会いすることができたことは、本当に幸せであったと思えます。そして、松本先生のご遺志を継ぎ、日本二分脊椎・水頭症研究振興財団の継続に力を尽くすことをお約束いたします。

奥様、ご家族の皆様には平安な日々が訪れることを心より願います。



手術中の松本先生 平成3年（1991年）



平成22年（2010年）研究助成受賞者と